

黙示録17章7-18節 「大淫婦の秘儀」

1A 獣 7-14

1B 昔おり、今はいない者 7-8

2B 七つの頭 9-11

3B 十本の角 12-14

2A 大淫婦 15-18

本文

黙示録 17 章を開いてください、私たちは前回、17 章の前半部分 1 節から 6 節までを読みました。今晚はその続きです。私たちは前回、獣の国に並ぶ、いやその上に座っている大いなる存在を見ました。主は、黙示録 14 章から、大いなる都バビロンが滅びることについて宣言しておられました。16 章における、最後の最後の災いでバビロンが倒壊します。そして 17 章に入るわけです。その存在について、獣の上に座っている、世界の王たちと不品行をしている女であり、金や宝石、真珠で身を飾り、金の杯をもって、なんとイエス様を証する者たちや聖徒たちの流された血を飲んで酔っていました。これは驚くべき、光景です。使徒ヨハネは、6 節で「この女を見たとき、非常に驚いた。」と言っています。

そしてついに、私たちは、これまでバビロンと呼ばれる都について、謎めいた思いがしていたのですが、それを御使いが解き明かす場面を読むこととなります。女もそうですが、獣の正体についても、数多くこれまで出てきていながら、そこにある「七つの頭」そして「十本の角」についての意味を知ることはありませんでした。その解き明かしを見ていくのです。

1A 獣 7-14

1B 昔おり、今はいない者 7-8

7 すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘義とを話してあげましょう。

御使いが問うています、「なぜ驚くのですか。」これの直訳は、「あなたは驚いているのですか。」であります。ヨハネが驚いていることに、驚いているのです。御使いたちにとっては、バビロンの存在というのは、世々に渡って知られていました。バビロンの発祥地であるユーフラテス川のところに、エデンの園がありましたが、そこにケルビムがおり、そこで墮落しました。それがサタンの起源です。エゼキエル書 28 章ですが、ツロの王への預言にそれが書かれています。そして、蛇の形をしてエバに現れて、彼女を惑わし、アダムに罪を犯させました。次に、ノアの時代の洪水の後に、地に満ちなさいという神の命令に反抗して、権力者としてニムロデが台頭、バビロンの出て来るシ

ヌアルの地にバベルの町を建てました。それに類するアシュルやニネベの町も建て、そこにも後に、主に逆らう力ある国アッシリヤが生まれます。そしてバビロンの王に対する預言の時に、はっきりとその背後の、明けの明星と称されるサタンの姿が出てきます。「イザヤ 14:12-15 暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」ですから、天において御使いたちは神に仕えているのですが、反逆している勢力の頭であるサタンが、バビロンやその他の権力者の背後に働いていることは、いつも見ていたことであるし、驚くに値するものではなかったのです。

ダニエル書を見れば、その世界を支配する帝国の台頭と興亡の幻の中で、活発に天使たちの戦いが繰り広げられていることは、10 章を見れば分かります。ペルシヤの君がおり、ギリシヤの君が出て来て、そしてイスラエルの君であるミカエルが戦って、イスラエルを救います。その時はバビロンはすでに崩壊していますので、バビロンの君という言葉は出てきませんが、はっきりと御使いの領域や主権の中心的なところに、墮落した天使の勢力がいます。ネブカデネザルが高ぶった時、草をはむ動物のようになってしまい、知性が取られましたが、その時も監視していたのが聖なる者、御使いでした。

さらにゼカリヤ書にも、バビロンの姿が天における悪の支配の中で登場します。「私と話していた御使いが出て来て、私に言った。「5:5-11 目を上げて、この出て行く物が何かを見よ。」私が、「それは何ですか。」と尋ねると、彼は言った。「これは、出て行くエパ枘だ。」そして言った。「これは、全地にある彼らの罪だ。」見よ。鉛のふたが持ち上げられ、エパ枘の中にひとりの女がすわっていた。彼は、「これは罪悪だ。」と言って、その女をエパ枘の中に閉じ込め、その口の上に鉛の重しをかぶせた。それから、私が目を上げて見ると、なんと、ふたりの女が出て来た。その翼は風をはらんでいた。彼女たちには、こうのとりの翼のような翼があり、彼女たちは、あのエパ枘を地と天との間に持ち上げた。そこで私は、私と話していた御使いに尋ねた。「あの者たちは、エパ枘をどこへ持って行くのですか。」彼は私に言った。「シヌアルの地で、あの女のために神殿を建てる。それが整うと、その台の上に安置するための。」エパ枘が出てきますが、18 章においてバビロンが巨大な富を蓄える存在として登場します。そして罪悪だと呼ばれる女ですが、これは淫婦のことです。それから、鶴(こうのとりの翼)のような翼を持っているとありますが、これは神に仕える天使ではなく、反逆する手下の墮落した天使たちのことです。そしてこれが、シヌアルに神殿、偽りの宗教を安置されるということです。バビロンのことです。

これだけのことが、歴史が始まってから天において繰り広げられていたのですから、ヨハネが初めて見るかのように驚いているのを見て、かえって驚いているのです。そして、「あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘義とを話してあげましょう」と言っ

ています。まず、獣の秘儀から話します。次に女の秘儀を話します。ところで「秘儀」というのは、「これまで隠されていたけれども、今、明らかにされる」という意味合いがあります。これまで、ずっと存在していたけれども、今、それが暴露されます。

8a あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。

初めに「獣」であります。この出てきた始まりを見てみましょう。実は、竜がその背後にいますので、竜の姿にも獣の姿が反映されていました。黙示録 12 章 3 節で、「見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。」とあります。そして、竜が地上に落とされたので、怒り狂って、海辺の砂に座りました。そして呼び起こしたのが、この獣です。13 章 1-2 節を読みます。「また私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭とがあった。その角には十の冠があり、その頭には神をけがす名があった。私の見たその獣は、ひょうに似ており、足は熊の足のようで、口はししの口のようなものであった。竜はこの獣に、自分の力と位と大きな権威とを与えた。」ダニエル書 7 章に、第一の獣が翼の持っている獅子、第二が熊、第三が豹、第四が鉄のきばと、十本の角を持つ獣が出てきましたが、黙示録の獣はこの時代というよりも、全ての獣の要素を持っている存在であることが分かります。豹に似ているが、足は熊のようで、口は獅子の口のようなのですから。そして、その七つの頭のうちの一つに、致命的な傷を受けるのですが、その傷が治ってしまいました。それで全地の人が彼を拝み、また彼に力を与えた竜、悪魔をも拝むようになります。

その時に、致命的な傷を受けた時に彼は実は、底知れぬ所に行っていました。二人の証人がエルサレムに現れて、火を噴いて預言したことを思い出してください。その時に彼らを獣が殺すのです、「11:7 そして彼らがあかしを終えると、底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。」あの、いなごのような、さそりのような毒を持つ得体の知れない悪霊どもが出てきたのは、底知れぬ所ですが、彼はそこに下り、そして出てきた時に、まるで生き返ったかのようにみなされたのです。そして、二人の証人をも殺します。

この獣について、ヨハネが見た時代において、「昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。」と言っているのです。底知れぬ所から出てくるのは、やがてと言っていますから、将来のことです。黙示録を紀元後 70 年のローマによるエルサレム破壊でほぼ成就したとする過去派と呼ばれる解釈をする人たちがいますが、いいえ、ヨハネがいた 90 年代の時にも、それは将来の出来事なのです。そしてヨハネの時には、彼は存在していません。ところが、彼は「昔」はいたという人物なのです。もう一度、これは「秘儀」であることを思い出してください、その霊的存在は既に昔からいたのだけれども、明らかにされてこなかったということです。獣について、これは既出の存在です。ダニエル書がそれです。ダニエル書 2 章で、人の像の夢があります。そこでバ

ビロン、メディア・ペルシヤ、ギリシヤ、そしてローマ、さらにローマ以後の世界と復興ローマがあります。7章で四頭の獣が出て来て、第四の獣に十本の角があって、その間から出てきた小さな角が大きくなり、三本が折れて、非常に大きな角となり、世界を支配するとありました。

しかしダニエル書 8章において、その角について、ギリシヤ時代に出て来る人物がその前触れであるかのように登場するのを見るのです。彼が、アンティオコス・エピファネスです。彼が非常に狡猾で横柄であり、数々と周囲の者たちを騙し力を得て、世界を荒らし、さらにユダヤ人の神への信仰、彼らの守っている律法に無理やり違反させるように強制し、聖所に偶像とそのいけにえを捧げさせた、荒らす忌むべき者であったのです。ダニエル書 11章にも、分割したギリシヤ帝国の後の、南の王と北の王との戦いが預言されており、北の王からアンティオコス・エピファネスが出て来る預言があります。8章にしても、11章にしても、彼の姿が詳細に預言されていますが、後半部分で、彼の行動には合致しない誇張されているように見える、預言に飛躍します。「8:25 彼は悪巧みによって欺きをその手で成功させ、心は高ぶり、不意に多くの人を滅ぼし、君の君に向かって立ち上がる。しかし、人手によらずに、彼は砕かれる。」「11:36-37 この王は、思いのままにふるまい、すべての神よりも自分を高め、大いなるものとし、神の神に向かってあきれ果てるようなことを語り、憤りが終わるまで栄える。定められていることが、なされるからである。彼は、先祖の神々を心にかけて、女たちの慕うものも、どんな神々も心にかけて。すべてにまさって自分を大きいものとするからだ。」アンティオコス・エピファネスに、テサロニケ第二 3章に出てくる「不法の秘密」が働いており、それで彼が終わりの日に現れる獣の姿をよく表していました。そして、今読んだ箇所には、その背後で働いている悪魔が、終わりの日に反キリストによって行なおうとしていることが、暴露されているのです。そして今、御使いはヨハネに、「昔、荒らす忌むべき者としてアンティオコス・エピファネスに働いていたが、今はそのような人物はいないが、将来、出てくるのだ。」と言っているのです。

8b 地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現われるのを見て驚きます。

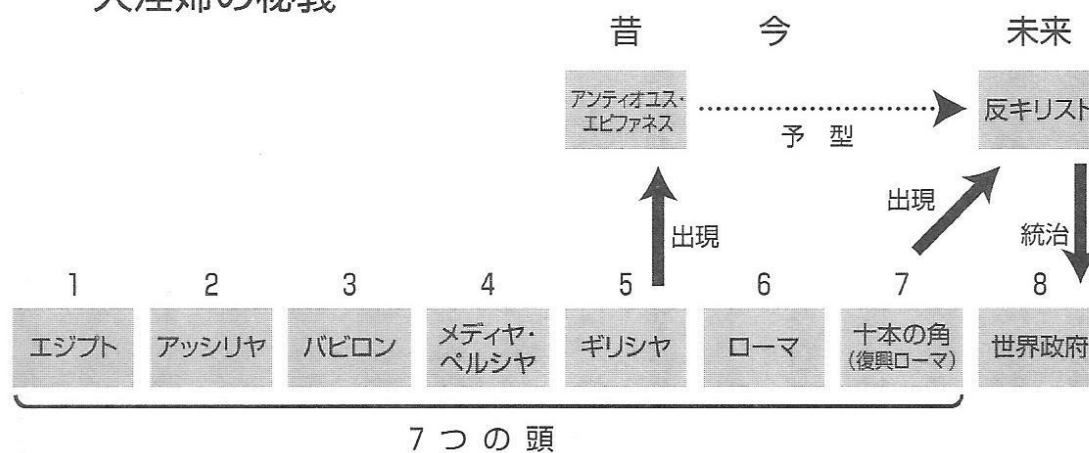
13章において、地上に住んでいる者たちが、彼がよみがえったかのように現れたのを見て、驚いている姿が出てきます。「そこで全地は驚いて、その獣に従い、そして竜を拝んだ。(3-4節)」とあります。その時に、獣を拝まない者たちがいて、その者たちは剣で殺されると預言されています。どうして殺されるのに、それでも拝まないかと言うと、13章 8節には「ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名を書き記されていない者はみな、彼を拝むようになる。」とあり、私たちの罪のために小羊のように屠られ、血潮を流された、そのイエスを主として告白し、証しを立てているからに他なりません。ですから、ここは七年の患難期の半ばであり、教会は地上にないのですが、それでも、イエスを告白すること、証しすることがいかに大切であるかを思わされます。

けれども、その告白さえ、「世の初めから」と強調されているのです。ペテロを思い出してください、人の前でイエス様を知らないと言いました、でも、人の前で知らないと言えば、神の前でイエス様はその人を知らないと言われたではないですか！彼は悔い改め、罪を赦していただきました。そして、彼はイエス様を告白するために、逆さで十字架に磔にされて殉教したと言われていました。つまり、主の選びの力なのです。選びを確かなものとしていくのです。私たちがどれだけ愛され、選ばれているかを知ることは大切です。そして、その選びにあるのだから、しっかりと努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を付け加えなさいと言った、ペテロの言葉があるのです(第二の手紙)。

2B 七つの頭 9-11

9 ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。10 五人はすでに倒れたが、一人は今おり、ほかの一人は、まだ来ていません。しかし彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。¹

大淫婦の秘義



御使いは、知恵が必要だと強調しています。「七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。」ということです。ここで、七人の王とは何か？という疑問が出てきます。ローマの七つの山のことであるという人たちがいます。けれども、先に獣の姿を見てお分りのように、単にローマだけを指しているのではなく、この世の権力者、つまり、世の初めの頃から働いている不法の秘密に関わることであることを教えていました。単にダニエル書 7 章の第四の獣だけのことではないのです。そうすると、ヨハネの時代はローマですが、その前に聖書では、世の権力者の姿として、五つの大国を見ることができます。初めにエジプトです。エジプトは、創世記 10 章によりますと、ノアによって呪われたハムの子で、ミツライムと呼ばれています。他の息子にニムロデがおり、アブラハムが約束の地に旅した時に、飢饉が来て、それでエジプトに下りました。それで女奴隷ハガルを連れて来て、後にイシュマエルを生んで、そして兄弟に敵対する者となっていき

¹ 「聖書預言の旅」明石清正著 リバイバル新聞社 262 頁

ました。エジプトは、世そのものを示しており、私たちに誘惑を与える存在です。そこでイスラエルの民が虐げられて、そしてそこから解放されるのが、神の贖いとなっていくのです。そして、メソポタミア文明では、アッシリヤ帝国が台頭しました。こちらも、創世記 10 章でニムロデとして出てきます。そして北イスラエルを捕囚の民として連れて行き、またユダの町々も攻めて行きました。次にバビロンです。それからメディア・ペルシヤです。そしてギリシヤです。それぞれが、ユダの民を支配し、時に蹂躪していました。これが、御使いが言っている「五人はすでに倒れた」ということです。そして「ひとりは今おり」は、もちろんローマです。

では、「ほかのひとは、まだ来ていません。」とは何なのか？これを知るのには、ダニエル書 2 章と 7 章を思い出さないとはいけません。2 章において、ローマは鉄のあし、脚の部分ですね、それを示していましたが、それだけでは終わりませんでした。「2:41-43 あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことです。その国には鉄の強さがあるでしょうが、あなたがご覧になったように、その鉄はどろどろの粘土と混じり合っているのです。その足の指が一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。鉄とどろどろの粘土が混じり合っているのをあなたがご覧になったように、それらは人間の種によって、互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。」鉄だけでなく、粘土が混ざっています。そして足の指は十本あります。その状態のことを指しています。7 章においては、それが第四の獣の十本の角に匹敵します。これは、ヨハネの時代にまだ来ていないと言っています。私たちは今、その粘土と鉄がまじりあった状態を経験しています。歴史において、西欧において西ローマ帝国が崩れても、その野心は残っていました。東欧においても、東ローマ帝国が崩れてもロシアが、「第三のローマ」と称して今でも野心を抱いています。そして、欧米列強の近代が始まり、ソ連が台頭して、戦後、冷戦になり、そして今に至るまでその対立は続いています。そして世界は、諸国が連合したり、提携することによって生き残ろうとしています。日本もがっちり、その枠組みの中にはめられています。それが、いつかは十の指導者たち、連合体になるでしょう。すでに、ヨーロッパ連合(EU)は機能しています。

11 また、昔いたが今はいない獣について言えば、彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです。そして彼はついには滅びます。

先に話した、アンティオコス・エピファネスを原型とする、あるいは予型とする反キリストが現れる話をしました。彼は、「彼は八番目でもありますが、先の七人のうちのひとりです」ということです。これは一体どういうことでしょうか？これを知るのには、次の箇所を読み進めると分かります。彼は、次に出てくる復興ローマ、十人の王のうちの一人名なのです。そして他の王たちが、自分たちの力と権威をその獣に与えるとあるのです(13-14 節)。そうです、十の諸国の連合体によって成り立つ世界が間もなくやって来ます。それはローマを復興させたようなものですが、けれども、ローマのような一枚岩にはなっていません。鉄と粘土で混じり合いません。この時には、宗教体であるバビロ

ンがその世界を牛耳っています。富もそこに集中しています。

しかし、その女は獣と他の王たちに倒されます。そして今度は、獣自身が神となり、獣崇拜という新しい宗教となるのです。それが八番目の王であり、黙示録 13 章に出てくる獣の国であり、世界政府なのです。ダニエルの最後の七十週目の週、七年において前半は、十の連合体であったものが、その半ばで反キリストに権力が移されて、それでその半ばで彼は絶対権力を掌握し、聖所に入って自分こそが神であると宣言、それで偽預言者の助けによって世界中で、自分を拝ませるように強制するのです。偽預言者は獣の像を造り、その像に物を言わせるようにして、それを拝ませるのです。これが八番目の国です。この権力の意向について、ダニエル書 7 章でも十本の角の中に出てくる小さな角として鮮やかに描いています。そして、彼が全権を掌握し、自分こそが神であるとして支配することについては、黙示録 13 章の他に、ダニエル書 11 章の後半部分において、マタイ 24 章のイエス様のオリーブ山における話にあります。「24:15-16 それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」それからテサロニケ第二 2 章にも出てきます。「2:3-4 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」

そして、実は最も大事なのは、「そして彼はついには滅びます。」ということです。荒らす憎むべき者について、最も詳細に描いているダニエルは、このことを何度も何度も強調しました。時が定められているということ、その患難は一時、二時、半時の間、つまり三年半しか続かないということを述べています。それから、テサロニケ 2 章でも、「2:8 その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。」となっているのです。私たちは、小預言書でずっと学んでいます。ナホム書において、あの横暴なアッシリヤに対して主が復讐されること、そしてハバクク書では、バビロンが徹底的な裁きを受けることを見ました。それは通過点であって、終着点では悪の勢力は完全に滅ぼされるのです。忍耐して待ちなさい、希望をもって待ちなさいと主が言われる所以です。

3B 十本の角 12-14

12 あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。13 この者どもは心をつにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。

七つの頭については、時系列的、歴史的な流れでした。エジプト、アッシリヤ、バビロン、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ、復興ローマです。そして八番目が、全ての秩序を覆す反キリストの国、獣の

国になります。けれども十本の角については、その七つの頭の七つ目のところ、復興ローマの部分です。十人の王ですが、世界に拡がる十の連合体であります。今、見てきたように、「彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。」とあります。十の連合体なので、そんな国と呼べるものではないのです。けれども、王のような権威は受けています。けれども、そこから獣以外の王たちが、心一つにして獣に権威を与えるのです。

ダニエル書7章では、こちら辺を詳しく話しています。「7:23-25 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らのあとに、もうひとりの王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。』ちょっと混乱しないように気を付けなさいといいますが、獣は十人の王のうち、三つを倒して、その三つの部分を自分の支配権とします。それから、残りの七人が彼に権威を委譲します。ですから、十人のうちの一人ではなく、十の連合体のうち、彼がどこからともなく表れて、そのうちの三つを彼が掌握します。それから他の七つが平和裏に権威が移行するので、二段階を踏んでいます。

いずれにしても、彼らが自発的に権威を移行しており、しかも、「心一つにして」いるということが曲者です。その彼らは、神とキリストのことになれば一斉に、心一つにして反抗し、戦いを挑むのですから、これは悪魔の一致と呼んでよいでしょう。一致が、すべてよいではありません。ピラトとヘロデは、仲が悪かったのですが、イエス様を有罪判決にすることについて、仲が良くなりました！ですから、イエス様が、自分は分裂をもたらすために地上に来られたことを話されました。「ルカ 12:49-53 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります。」主が来られたのは、聖霊による火、聖めの火が来るためであり、そして十字架という苦しみのバプテスマを受けなければいけません。十字架によって人々が聖なる者とされます。しかし、そのために、十字架のつまずきのために家族という一致でさえ分裂するということです。北朝鮮においては、誰かが信仰を持てば、密告されます。家族全員が強制収容所に入れられてしまうことを恐れるからです。キリストの前で、その十字架によって、心が新たに御霊によって変えられていくところの一致こそが、真実の一致です。

14 この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王

の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

今、話した通り、獣の国になり、王たちが獣を筆頭にして一つになっています。そして、神とキリストに対して戦いを挑みます。詩篇第二篇に、国々が集まって、神とキリストに反抗することが書かれています。「2:1-3 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、主と、主に油をそそがれた者とともに逆らう。「さあ、彼らのかせを打ち碎き、彼らの綱を、解き捨てよう。」そして、黙示録 19 章の後半にこの光景が預言されており、イエス様は白い馬に乗っておられ、口から出て来る剣によって彼らに打ち勝たれます。王の王として、主の主として来られます。これまでの帝国の王、バビロンも、ローマも、全ての帝国の王が、自らが王の王、主の主であるとしましたが、彼らがいかに愚かであることが、主の来臨の、輝かしい栄光と力の前で明らかにされます。そして、「小羊」とイエス様が呼ばれ続けていることが大切です。主は、栄光と力を身にまといられた方ですが、どこまでも罪を取り除くために自ら屠られた小羊の姿をお捨てにならないのです。キリストの十字架にこそ、人を救う神の力があるのです。

そして、小羊と共に帰って来る者たちがいます。これも聖書を通じて、預言されています。ゼカリヤ書には、「私たちの神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。(14:5)」とあります。テサロニケ第一と第二で、主が聖徒と共に来られることが強調されています。「1テサロニケ 3:13 また、あなたがたの心を強め、私たちの主イエスがご自分のすべての聖徒とともに再び来られるとき、私たちの父なる神の御前で、聖く、責められるところのない者としてくださいますように。」ローマ人への手紙には、私たちがキリストに結ばれた者として、その十字架と死、そして甦りとも一つになっていることを、6章で話しています。そして8章において、キリストと苦難を共にしているなら、私たちはキリストとの共同相続人であると書かれています(17節)。キリストは、甦られた後、天に昇られました。そして父なる神の右の座に着いておられます。そこから立ち上がり、天から地上に戻られます。キリストについている者たちも、同じようにされます。復活し、そして天に引き上げられます。そしてキリストにあって、その権威も任され、キリストが地上に戻られる時に、栄光の姿をもって戻ってくるのです。「コロサイ 3:4 私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現われます。」

そして、とても大切な励まし、慰めの言葉があります。「彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者」であります。この三つは、聖書全体の中で何度も何度も、主がご自分の民に教えられていることです。選ばれており、召し出され、そして、主に忠実に仕えるということです。「ローマ 8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」主は予め、キリストのように栄光を表す者として定められました。けれども、それは自動的なものでは決してありません。この地上において、私たちがあらゆる努力をして、召された事、選ばれたことを確かなものとしていきます。「2ペテロ 1:10 ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなもの

としなさい。これらのことを行なっていれば、つまりくことなど決してありません。」自分が忠実になるから、選ばれる、召されるのではありません。むしろ逆です。圧倒的な恵みによって、選ばれるにはふさしくない者、罪人で、滅ぼされ、神の怒りを受けるしかない自分が、それでも神が愛してくださり、私を引き上げてくださいました。その恵みに、選びと召しがあります。そして、神が御力を与えられているのですから、その力によって奮闘します。それが、忠実な者であります。愛され、選ばれ、召されたから応答として、忠実な者なのです。最後の日まで、互いに励まし合い、罪の惑わしを受けないようにし、心を頑なにせず、走っていきましょう。

2A 大淫婦 15-18

15 御使いはまた私に言った。「あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です。

ここから大淫婦の秘儀です。大淫婦が、「大水の上」に座っていたことを思い出してください(1節)。その座っていたのは、ここにあるように、「もろもろの民族、群衆、国民、国語」です。福音が、アブラハムに与えられた祝福として、キリストにあつてあらゆる民族、群衆、国民、国語に広がっていくのと同じように、バビロンの影響はもろもろの民族、群衆、国民、国語に広がっています。今日、興味深い記事を読みました。若者に伝道する時に、就職活動が一種の宗教、偶像礼拝になっていると伝える伝道者がいるそうです。彼は元、ムスリム伝道の経験者です。

こう書いてありましたね、「自分は違う」と否定する学生たちに、彼はムスリムと日本の就活の共通性を指摘します。敬虔なムスリムの方々は、定時に礼拝をささげ、断食をしますが、彼の説明によれば、それは、神様により受け入れられるようになるため。このことは、学生たちが会社に受け入れられるよう就活に必死になるのに似ているわけです。日本では、断食で命を落とすムスリムの方々を「信じられない」と言いますが、海外では、日本の過労死や就活の失敗で命を断つ学生を「信じられない」と評価します。そこで、学生たちは自分たちが、社会や世間という偶像から、拒絶されることを恐れ、受け入れられることに命を懸けていることに気が付きます。まさに「受容と排除の神」からの受容を求めて生きる自分自身を発見するのです。」²いかがでしょうか、これほどまでに、隅々まで人々の心に就活にある偶像礼拝がしみ込んでいるのです。私たちは、神の愛を知ることのできないようにさせる、大淫婦の支配があることを知るので。それは、偽りの宗教であり、18章で見ますが、密接に経済活動、巨額の富が動く体制の中にあります。

16 あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。

ここは、注意して目に留めるべき出来事です。獣という権力者でさえ、この女の下にいました。女

² <https://www.facebook.com/kiyoshi.mizutani.37/posts/1573737662708023>

の中で権力者は生きていたのです。宗教と富と、それから政治が密着しています。ネットには、今、流行っている宗教やカルトを詳しく調査しているサイトがあるのですが、そこに、衆院選に候補として出た政治家の三百人が、何らかのオカルト宗教やカルト宗教とのつながりがあることを、具体的に書いていました。自民党議員はもちろんのこと、無神論の共産党以外はほぼ全てが宗教団体、しかもカルトやオカルト的な宗教団体との関係を持っています。(共産党も、また巨大な疑似宗教だと言えますが。)³これは古今東西、共通した課題であり、ゆえに私たちキリスト者はしっかりと目を覚まして、目に見えるもの、流行、それがたとえキリスト教会の中であっても存在して、そうした影響力のある流れに安易に従わないことが重要です。終わりの日には、その勢いがますます激しくなり、一つにされていきます。

しかし、そうした甘い汁を吸っている、金の杯をもって巨額の富を王たちから得ている女は、ついに憎まれます。自分たちが利用していれば、ついに憎まれ、滅ぼされるのです。人の情欲は、一度、そのような関係を持てば、激しい憎しみになりますね。ダビデの息子アムノンが、腹違いの妹タマルに恋し、無理やり寝ましたが、その直後に、その愛していた愛よりも激しく憎んだとあります。そのようなことが、大淫婦にも起こります。ですから自分が、福音にある神の力ではなく、政治的な力、また金銭にある力に頼れば、必ず世そのものからも捨てられることになります。

17 それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行なう思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心をつにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。

ここに、神の深淵な御心があります。私たちはハバクク書を学び、バビロンをユダを裁く器にしておられたことを学びました。ユダにある悪を、もっと大きな悪を行なっているバビロンによって、正しく裁くのです。そんなことがなぜできるのでしょうか？とハバククは叫びましたが、主はバビロンを完膚なきまでに滅ぼされることも約束されました。それと同じ事を、獣と大淫婦との関係でも行われます。大淫婦を滅ぼすことは、主の御心です。それで、獣と王たちが彼女を憎むことにおいて一つになっているのを利用されて、大淫婦を滅ぼすようにされるのです。そして、彼らが獣を神としてあがめ、そして神とキリストに反抗する時に、彼らを徹底的に滅ぼされるのです。ここの御使いの説明を読むと、なぜ他の王たちが獣に権威を与えるようにするかというと、大淫婦への憎しみと関わりがあることが分かります。彼らは共通して、大淫婦が、うざったい存在になります。

18 あなたが見たあの女は、地上の王たちを支配する大きな都のことです。」

ここで御使いが、はっきりと大淫婦が大きな都であると言っています。ネブカデネザルのバビロンが、国々を征服した後に君臨した都であり、ローマ時代のローマも、国々を征服した後の都であり、そして終わりの日にも顕著になる都も、同じように世界に影響力を持つ都です。この都がどこなの

³ <http://dailycult.blogspot.jp/2017/10/2017300.html>

か、意見が分れます。宗教改革者は、はっきりとバチカンがバビロンだと断定しました。ですから、プロテスタントの伝統としてそのような解釈が強くあります。けれども、ただバチカンだけに留めて良いものなのか？また、バビロンが文字通り再びイラク南部のところに出現するという見方もあります。私も正直分かりません。けれども、バチカンはかなりの影響力を世界に及ぼし、世界の政治指導者は法王の謁見し、プロテスタントも和解という言葉で一つにされようとしています。気を付けなければいけないのは、バチカンだけに焦点を当てることです。それよりも、もっと身近な霊的なことです。福音の真理をしっかりと持っていること、日々の生活を歩むこと、その中で世の流れがあまりにも激しいこと。けれども、最後までしっかりと初めの確信を抱いているなら救われる事。中心にバビロンという霊的存在があり、その濁流にのまれないこと。それから、次に 19 章以降で天が出て来て、キリストの支配が出て来て、そして最後に天からのエルサレムが来ます。私たちの都はバビロンにはなく、エルサレムにあるのだ。だから、主なる神をいつも、御霊によって礼拝して、天のエルサレムにつながっていることを告白していきたいと思います。

